



Title	<書評>住田育法・牛島万共編『ラテンアメリカをめぐるグローバル経済圏：「潮と風」と帆船によるポルトガル・スペインのネットワーク』明石書店、2025年、272頁
Author(s)	住田, 育法
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2025, 51, p. 80-85
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/103346">https://hdl.handle.net/11094/103346</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 自著紹介

住田育法・牛島万共編『ラテンアメリカをめぐるグローバル経済圏——「潮と風」と帆船によるポルトガル・スペインのネットワーク』明石書店、2025年、272頁

住田 育法

### 1. 「グローバルヒストリー」に向かって

本書では、大航海時代のヒトやモノの移動について、ポルトガルやスペイン、イギリス、イタリアなど現在の国名を表現として用いているものの、一部を除き複数の章で19世紀の国民国家が形成される以前を扱っている。国民国家の概念が定着するのは19世紀以降であり、グローバルという言葉がひろく用いられるのは21世紀になってからである。15世紀以降ポルトガルを中心となった海外進出においては、イタリア人のコロンブスやスペイン系バスク人のフアンシスコ・ザビエル（シャビエル）、同じくバスク人のイエズス会初代総長イグナチオ・デ・ロヨラたちが登場するが、彼らはポルトガルを中心とする大航海時代の脇役ではなく、活動の主役であった。国籍が重視される現在とは異なり、国境を越えて地球規模に大海原を移動する多様なヒトやモノのネットワークのなかで活躍したのである。

とくに注目できるのは、1580年から1640年にいたるスペインによるポルトガル併合の期間である。イベリア連合と呼ばれる同君連合に基づくシステムによって、スペインがポルトガルを植民地としたのではなく、スペイン・ポルトガル間における国境という垣根が低くなっていた一方で、法律や言語などの自治は保たれていた。植民地の支配もポルトガルが継続して行ったのであり、ブラジルがスペインの植民地になったのではない。ラテンアメリカをめぐっては、大西洋を挟んだヨーロッパ、アフリカ、そして新大陸のアメリカを囲む空間において、商品としてのモノやヒトの交易が展開したのである。とくに、黒

人奴隸貿易のネットワークが南米大陸の大西洋岸の都市とアフリカのルアンダなどとの帆船の往復によって築かれていった。

## 2. 「潮と風」に運ばれた人々

「種子島」に鉄砲が伝わって 480 年目の前年 2023 年 12 月 9 日に、「潮と風」をキーワードとして、京都外国语大学ラテンアメリカ研究センターが「潮と風に運ばれた人々——ラテンアメリカ世界を巡る『グローバル経済圏』の形成と変容を考える」と題して研究講座を開催した。本書はその成果である。

総合司会のフェリッペ・モッタ（京都外国语大学）のリードで、大越翼センター長（当時）が登壇者の発表のまえに以下の挨拶を行った。

先スペイン期の大陸内経済圏の構築に端を発し、16世紀以降ヨーロッパ諸国のアメリカ大陸の進出に始まる相互の政治的・経済的せめぎ合いのなかで、太平洋と大西洋との関連を見据えつつ、ラテンアメリカ世界を舞台とした「グローバル（地球規模）経済圏」の有り様を分析したい。ヨーロッパ各国の役割に加え、その経済を支えた商人や職人たち、さらには商品として扱われていた奴隸を含むモノに焦点を当てる。また、風と潮に依存しながらの船の交易における時間的、量的側面などにも目を向ける。そして、植民地時代に構築された「グローバル経済圏」の原型が、どのように現代のものに包摂されていくのかについての具体的プロセスを考えたい、という趣旨であった。

この挨拶に続く研究講座の内容に従って、本書ではポルトガルを中心に、5名の登壇者にあらたに数名の著者を加えて、第1部「潮と風の歴史と社会」でヨーロッパ人による大航海時代の説明から始めた。

## 3. 大西洋を舞台に

第1部の第1章「コロンブスはポルトガルで何を学んだのか——潮と風の秘密をめぐって」（合田昌史京都大学名誉教授）では、大航海時代を成功させた航海上の科学技術やその知識について考察している。とくにコロンブスのポルトガル時代（1476～85年）に注目し、イタリア人の彼が北大西洋の海洋地理をどのようにして習得し、大四辺形の航跡を考案するに至ったのか、という問い合わせを掲げて述べている。ポルトガルにおけるコロンブスの学習と応用はふたりのポルトガル人、ガ

マとマゼランに受け継がれた。

第2章「近世のゴアおよび里斯ボンにおける日本人奴隸の状況」(ルシオ・デ・ソウザ 東京外国語大学特任准教授)は、一次史料から読み解くことのできる日本人奴隸の個人史について明らかにしている。ゴアはインドであるが、16世紀という変革の時代のポルトガル領インディアは大航海時代にポルトガルがアジア、アフリカ、インド洋地域に築き上げた複雑な領土と拠点のネットワークを指す。したがって、東アジアからポルトガルに至る広大な植民地的枠組みのなかでの日本人奴隸を取りあげている。そして、ポルトガルの里斯ボンに渡った日本人には宗教的役割を担った個人と奴隸として扱われた個人がいた。

第3章「南米大陸北部の空間のナショナリズム——17・18世紀のアマゾン川の航行」(住田育法京都外国語大学名誉教授)では、ポルトガルのアマゾン支配は「面」ではなく、「点と線」による支配であったことを立証している。ブラジル北部のアマゾン川地域の北と東から攻めてくるフランス人、イギリス人、オランダ人、さらに西からのスペイン人の攻撃に対する要塞や砦による防衛網が18世紀に構築された。21世紀の今に至るまでポルトガル語圏のブラジルが広大なアマゾン空間を国土として存続させた歴史的背景を述べている。

第4章「ポルトガル海洋帝国におけるポンバル改革——「啓蒙」と「革命」の間で」(疋谷憲洋大分県立芸術文化短期大学教授)では、ポンバルによる改革がポルトガル海洋帝国の枠組みを確立するうえで重要であったことを明らかにしている。ポルトガルの18世紀はスペイン継承戦争(1701~14年)で幕を開けた。植民地ブラジルは「金の時代」を迎え、1750年のマドリード条約によって「ブラジル」の境界画定を獲得する。ポンバル改革はイエズス会を攻撃したため20世紀までポンバルの評価が相反する原因を招いているとの著者の指摘は興味深い。

第1章から第4章まではポルトガルを中心とする大西洋における潮と風の歴史を取りあげた。そして第5章「大西洋貿易とラテンアメリカ——19世紀ブラジルを中心に」(布留川正博同志社大学名誉教授)では、大西洋の奴隸貿易に加えて、ラテンアメリカの太平洋岸の先住民奴隸や銀の生産に触れている。ポルトガルなどの外国商人に奴隸供給を請け負わせるアシエント契約を通じて、カリブ海諸島の植民地では黒人奴隸の導入が進められ、銀を生産するペルー副王領やヌエバ・エ

スペニッシュ副王領でも、先住民に加え、黒人奴隸が導入された。一方、大西洋に面したブラジルでは、19世紀にコーヒー生産を中心とする黒人奴隸の輸入がイギリスの禁圧政策の下で進められた。

#### 4. 新大陸から太平洋への展開

第6章「19世紀前半のメキシコ銀をめぐるグローバルヒストリー——『東航紀聞』に見られるメキシコへの日本人漂流民の記録を手掛かりに」（牛島万京都外国語大学教授）では、「潮と風」の地域がメキシコの西の太平洋に移動する。とくにメキシコ銀や日本人漂流民などを中心に19世紀のグローバルヒストリーの動向を明らかにしている。

カリブ海と大西洋に面するメキシコの19世紀の歴史は、外国の介入や脅威にさらされてきた。このメキシコと東アジアの日本がつなぐ19世紀の日本人の漂流と帰還の記録に基づいて太平洋を舞台とする移動の姿を描いている。太平洋東岸の日本からメキシコへヒトが移動したのは、中国が求める銀の取引が重要になっていたからである。19世紀に太平洋を漂流し帰国した一人の日本人善助の調書に基づく記録『東航紀聞』に従って移動の実情を示している。

銀をめぐるグローバルヒストリーは16世紀のスペインの中南米植民地の時代に始まった。ボリビアのポトシ銀山やメキシコなどからの大量の銀が先住民を駆使して略奪的にスペインのセビーリャに運ばれた。16世紀後半には当時ヌエバ・エスパニヤと呼ばれたメキシコのアカプルコとフィリピンのマニラ間の交易が展開する。

銀本位制であった17世紀から19世紀のアジアにおいて、新大陸の銀貨は国際経済に多大な影響を与えた。新大陸の銀は中国、東南アジア、インドなどに運ばれた。1719年から1833年のあいだにアジアへ運ばれた銀は6千243トンと見積もられている。その65%が米国の独立革命（1765年）以降、35%はナポレオンのスペイン支配（1808年）以降のものであった。これは、18世紀から19世紀前半にかけて、アジアへはそれまでの最大の銀が流れていたことを意味している。さらに重要なことは1833年に東インド会社の貿易独占が解かれ、貿易の自由化がなされたことであった。

19世紀の前半にはイギリスをはじめ世界は金本位制に移行しつつあるなか、世界的に銀の価値が低下し始めていた。しかし、アジア、特

に中国では銀本位制が続けられ、中国にメキシコ銀が輸出され続けた。そしてそれを実際に運搬していたのは米国船であり、米国は自国においても19世紀半ばまでメキシコ銀が法定通貨として流通していた。メキシコも1909年に金本位制に移行するが、19世紀末まで中国、米国、メキシコは、いわゆるメキシコ銀をめぐる環太平洋上におけるグローバル経済圏を別に形成し、これがイギリスを中心とする19世紀グローバル経済をより潤すものとなっていたと著者は説明している。

## 5. 「潮と風」の歴史の周辺、結び

第2部「潮と風の歴史の周辺」では、コラム①（住田・疋谷）で大航海時代の主役であったポルトガルの形成史について論じている。ノーベル文学賞を受けたサラマーゴの作品『石のいかだ』をとりあげ、作家の大西洋への思いを推察している。

コラム②（富田晃弘前大学教授）は、コロンブスの探検に反対する黒い伝説の一環としての人食い言説について考察している。

コラム③（大越翼京都外国語大学教授）はスペイン領アメリカの支配のなかでの先住民の主体性を、とくにマヤ王室によるスペイン王室に向けた派遣団結成や直接交渉の史実を紐解きながら重視している。

コラム④（南博史京都外国語大学教授）は、新大陸の南北両古代文明圏に挟まれた中間領域などの考古学的課題について論じ、パブリックミュージアムを拠点とする考古学調査結果の一般開放の意義にもふれている。

コラム⑤（牛島）では、19世紀の日本人漂流民の軌跡の実態と、当時の幕末の日本と諸外国との交渉のはざまでいかに漂流民個人が貢献したか、その役割について述べている。

以上本書では、第1部「潮と風の歴史と社会」ならびに第2部「潮と風の歴史の周辺」について9名の著者が、大航海時代のイベリア半島の民の行動を中心にラテンアメリカをめぐるグローバル経済圏の姿を描いた。近年、グローバルヒストリー的な視点からとらえなおした「世界史」研究に対する関心が学界でも高まっている。出版の市場においても世界史の本が流通し、一定の読者層を形成している。本書はポルトガル、スペイン、ラテンアメリカ、アジアを中心とする「世界

史」の変容および同化する動的な歴史的過程についてふれているが、執筆者の考察の及ばない点もあるかもしれない。読者のみなさんのご批判、ご助言を頂戴できれば幸いである。